

国内の抱っこひも等の市場と安全対策

- 抱っこひも等の国内市場は、80-100 万個（年間販売数）と推計されており、その規模は拡大傾向にある。
- 近年は、複数の抱き方ができる多機能タイプが増えており、中でも「腰ベルトと両肩ベルトで支え、縦対面抱っことおんぶができるタイプ」が多く、半数を占めている。
- 欧米製品の人気が高く、シェアは50%程度と推定される。
- 国内の安全基準は、任意のSG基準があり、適用製品ではこれをベースとした安全対策が実施されている。
- SG基準では転落防止対策として、留め具を二重に施すことや、注意喚起表示が規定されている。
- 欧米製品は海外の任意規格（ASTM規格、EN規格）に基づいて安全対策が実施されているが、適用月齢や設計思想がSG基準と異なる部分がある。
- 欧米製品を並行輸入で購入するケースにおいては、日本語の取扱説明書がない、問い合わせができないなど、安全面での懸念が残る。

(1) 国内の抱っこひも等の市場の動向

＜抱っこひも等の使い方の種類＞

- 抱っこひも等の使い方の種類として、主に以下の5種類がある。商品としては、それぞれ専用のタイプと、2~4種類の使い方ができる多機能タイプがある。多機能タイプでは、成長に応じて使い方を変えることができるため、長く使うことができる。

<p>① 横抱っこ</p>  <p>ヨコ抱っこ</p>	<p>② 縦対面抱っこ</p>  <p>タテ抱っこ</p>	<p>③ 前向き抱っこ</p>  <p>前向き抱っこ</p>	<p>④ おんぶ</p>  <p>おんぶ</p>	<p>⑤ 腰抱っこ (ななめ抱っこ)</p>  <p>腰抱っこ</p>
--	--	---	--	--

- 首の座らない4か月未満の乳児は、横抱っこができるもの（SG基準）、または、首を支える機能を持った縦抱っこタイプ（欧米規格）を使用することになる。前者は、乳児の様子がよく見え、乳児の首や体に負担をかけない、後者は、開脚姿勢で自然な状態で包み込むなど、それぞれ考えられ設計されている。
- 同じ製品で使い方を变えるのは、成長に応じた対応（首据わりまで横抱っこ→首が据わったら縦抱っこやおんぶ）の他、外出時（抱っこ）、家事をする時（おんぶ）、寝かしつけ時（抱っこ）、寝た後

(おんぶ) などの使用状況に応じた対応がある。

<市場の動向>

- 抱っこひも等の国内市場は、80-100 万個（年間販売数）と推計されており、その規模は拡大傾向にある。なお、近年の出生数は 100-110 万人であり、「おさがり」での利用も多い商品であることから、複数個所有するケースが多いと考えられる。
- 近年「腰ベルトと両肩ベルトで支え、縦対面抱っことおんぶができるタイプ」が増えており、半数を占めている。
- 欧米製品は、上記のタイプを中心に人気が高まっており、そのシェアは 50%程度と推定される。
- 他に、横抱っこ、前向き抱っこ、腰抱っこ（ななめ抱っこ）ができるものもある。一種類の使い方ができない専用タイプは少数派となっている。
- スリングは、上記の市場のうち 1 割程度と推計されている。スリングは約 10 年前をピークとしてその後減少傾向にある。

(2) 抱っこひも等の安全対策

<実施されている安全対策>

- 国内では、任意の安全基準として一般財団法人製品安全協会が定める SG 基準（昭和 51 年制定、平成 21 年最終改定）があり、製品の強度や材質等の指定、子供の身体への影響（はさまれ防止、付属品の誤飲防止、素材の安全性など）等を規定している。
- SG 基準の転落防止対策としては、「ダミーを用いて、前にかがむ、両手の上げ下ろしなど動作をして、乳幼児の身体を確実に保持できる」、「(留め具を二重にするなどして) 一つの留め具が外れたとしても、乳幼児が転落しない」、「落下に関する注意事項を本体に表示、取扱説明書に記載する」ことが規定されている。
- 欧米製品においては、海外の任意規格（ASTM 規格、EN 規格）に基づいて安全対策が実施されている。
- メーカー各社では、SG 基準等をベースとし、更に厳しい自社基準を設定しているところもある。
- メーカー各社では、取扱説明書や製品本体の表示において、転落防止に関し、以下のような注意を行っている¹。
 - ・着脱は、安全な場所で行う。
 - ・前かがみ等、無理な姿勢をしない。
 - ・緩みがないように、ひもを調節して装着する²。
 - ・バックルが外れた場合の対策補助器具を確実に使用する。
 - ・できるだけ介助者に支えてもらう³。
 - ・抱っこの際は必ず手で支える。（一部の欧米製品）
 - ・抱っこひもに子供を乗せたまま抱き方を変更しない⁴。（一部の欧米製品）

¹ メーカーによって構造が異なるため、注意喚起の内容は異なる。

² おんぶと抱っこ、母親と父親で使い分ける際には、ひもの長さを調整し直す必要がある。

³ 練習時の介助を明記するもの、おんぶ装着時に推奨しているものなどがある。

・常に両手が使えるようにしておく。(一部の欧米製品)

- お客様窓口や販売店を通じてメーカーに報告された事故やヒヤリ・ハットの経験は、各メーカーで取りまとめられ、設計の改善に活かされている。

<安全対策についての現状認識>

- 海外の規格においては、4か月未満児も縦抱きを標準とするなど、適用月齢や設計思想がSG基準と異なる部分があるため、現時点では多種多様な製品が市場に混在している。
- 海外製品を並行輸入で購入するケースにおいては、日本語の取扱説明書がない・問い合わせできないなど、安全面での懸念が残る。

(調査協力：株式会社ダッドウェイ、コンビ株式会社、株式会社赤ちゃん本舗
アプリカ・チルドレンズプロダクツ株式会社)

(調査時期：平成26年7月)

⁴ 縦抱っこからおんぶへの変更方法の説明を記載する製品もある。

